

評 価 委 員 講 評

小 林 隆

評価委員の名のもとに正直なところ3年間にわたって「母子相互作用」の問題を興味深く学ばせてもらったというのが実感で、班長の小林登教授、幹事ははじめとして班のメンバーの各位に感謝する次第である。

人間の人格が形成されていく原初的な段階の問題に焦点を絞って、マルチ学際的な見事なバランス構成の研究班を結成し、ユニークな研究成果を獲得されてきたことに深い敬意を表したい。このテーマはどうしても長期にわたる発育過程を検証して原初の段階の母子相互作用が及ぼす結果を実証しなければならないので、困難なフォローアップの壁が感じられるが、よくそれを乗り越えて研究の対象とした一定集団の追跡が熱心に行われ、レトロスペクティブにもプロスペクティブにも興味深い成果が報告されている。それぞれの研究報告毎に、マルチ学際的な新鮮さと興味を感じるのが常である。一つのdisciplinの中に閉じこもってはおのづから視野の狭さと限界を免れえないことを自戒し、このような班研究の重要性が再認識される。しかしその反面において専門を著しく異にするため、その内容を垣間見ることになりがちで、専門的に深く討論することが困難なことも否定できない。今後このような制約をどのように解消して行けばよいか、この種の研究班にとっては解決すべき一般論的な課題のように感じられる。母子相互作用の問題ではdeprivation現象の追及は不可欠の研究テーマであり、この班では猿や犬の実験成績が報告されて、比較動物学的に甚だ印象的であり、思わず人の子供の場合のことが類推されて危惧をおぼえるのである。つまり本研究班のプロジェクトがいかに重要であるかがわかる。その意味では極小未熟児は長期にわたり保育器の中で母親から隔離されて育つので、その後の心理学的、行動学的な発育結果のフォローアップは人におけるdeprivation現象に関するモデル的実験の意義を持つように考えられる。そこで共通のテーマとして全国的な規模で、多数の極小未熟児の追跡調査を行うことは母子相互作用の研究にとって重要なプロジェクトとなるのではあるまいか。動物の母子相互作用の研究でわれわれがいつもインパクトを受けるのは、その原初的な適応や学習の時期に常に臨界性が内在していて、そのタイミングがはずれたり、狂うと動物の子供には決定的なダメージが起るという事実である。人の胎児、新生児、乳児及び幼児に関してのこのような臨界時期の問題が明らかにされ、育児の指針が確立することを期待したい。

最後にこのような母子相互作用の研究により多くの産科医が参画してこの班研究の貴重な成果が産婦人科領域にfeedbackしなければならないと感じる。そのようなインテグレーションを今後どのように実現させるかは、この班に参画の産婦人科メンバーの責務でもあると思う。上述のようなfeedback

を欠いては生命誕生というドラマチックではあるが、ごく瞬間的な時点の役割だけを負っていることになってdisciplinとしては孤立的なニュアンスを筆者は感じている。かつては新生児は「産科と小児科の谷間」にあると云々されたことからこのことがわかるであろう。幸い今日では新生児専門科の輩出によって谷間からの脚却は実現しており隔世の感がある。しかしこの程度に満足することなく、両科のインテグレーションを越えてもっと広く本研究班が示唆するようなマルチ学際的な哺育や発育学の学問体系を確立するにはシステムの、構造的な対策が必要のように考えられる。そのモデルは大阪府が完成した母子保健総合センター、つまり母子医療センターとしての治療と研究の総合機関を設立することである。（ここには将来小児病院も併設されるという）。このような施設を核とし、母体にすれば母子相互作用の研究ももっと恒久的且つ有効に成果があがるにちがいないからである。幸いこの大阪の施設からも班員が参画されていることは心強いことである。近代文明における人間性の破壊が憂えられていることに鑑みてもわが国に大阪府のものと同じような施設が全国的に簇出することが切望されるのである。